

# INMIP



MUSEUMSFORPEACE.ORG

NEWSLETTER # 39  
ニュースレター#39

SEPTEMBER 2023  
2023年9月



# INMP

INTERNATIONAL NETWORK  
OF MUSEUMS FOR PEACE  
NEWSLETTER

ISSUE #39

## 投稿について

# 40号 (2024年4月)

第40号の投稿締め切りは2024年2月15日。

メールでの投稿はKya Kim（編集長）まで：[inmp.news@gmail.com](mailto:inmp.news@gmail.com)

編集部への質問／コメント：[inmp.news@gmail.com](mailto:inmp.news@gmail.com)

記事を歓迎します。

（日本語で投稿したい場合は、[inmpoffice@gmail.com](mailto:inmpoffice@gmail.com)へご連絡  
ください。）

平和に関連する問題やテーマに焦点を当てた簡潔な記事

（英文500ワード以内、画像3枚まで、別ファイルとして添付）

展覧会、平和教育イベントなど、INMP加盟館からのお知らせ。

（英文500ワード以内、画像3枚まで、別ファイルとして添付）

出版機会、論文募集、平和関連会議、助成金・プロジェクト募集、  
奨学金などのお知らせ。

（英文250語以内、画像3枚まで、別ファイルとして添付）。

出版・書籍のお知らせ

（英文250後以内、画像3枚まで、別ファイルとして添付）

平和に関連するアートワーク、詩、写真（画像は高解像度の.jpgファイ  
ルのみお送りください）

INMPニュースレターは日本語とスペイン語でもご覧いただけます。

本ニュースレターの記事は、執筆者の見解を代表するものであり、必ずしも編集チ  
ームや平和のための博物館国際ネットワークのメンバーの見解ではありません。

## 購読申し込みはこちら

<https://forms.gle/jdxR5mng3d7qqK1v7>



表紙の画像

[Día de Visita / Day of Visit](#)

訪問日

チリのアルピレラ、ビクトリア・ディアス・カロ  
1988年

大島博光記念館蔵

写真 Martin Melaugh, © Conflict Textiles

ピノチェト独裁政権初期の数カ月間、最大7,000人が政権に拘束された。この作品では、アーティストのビクトリア・ディアス・カロがチリの刑務所の中に入り、面会日に両手を広げて家族を迎えようとする政治犯の切なさをとらえている。その傍らでは、あるカップルがあまりにも短い絆の時間に没頭している。これらの生き生きとした、生命に満ち溢れたシーンは、背景の陰影のある軍人たちが監視の目を光らせているのとは対照的である。

愛する人の投獄に対処する女性たちにとって、アルピレラを作るために織物の技術を使うことは、紛争とその記憶と日常的に共存するための手段となった。自国の政治的出来事と彼女たちの日常生活は切り離せないものとなった。

コンフリクト・テキスタイル・コレクションの詳細は、本号7ページをご覧ください。

## CONTENTS 内容

表紙の画像の詳細	3
コーディネーターからのメッセージ	4
第11回INMP会議報告	5
コンフリクト・テキスタイル	7
注目のアルピレラ 1	8
追悼：ウィリアム・ケリー	9
ブラッドフォード平和博物館は移転します！	11
会員からの宝物	12
大島博光記念館（日本）	15
アルバート・アインシュタイン博物館 （エルサレム）	17
注目のアルピレラ 2	18
八重山平和祈念館	19
伊陸ロンサムレディ号平和記念館 「あなたも平和のヒーローになれる」展	20 21
秘密の戦争	23
注目のアルピレラ	25
ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ展	26
平和のヒロインたち	27
NFL、核戦争の愚かさの博物館として バンカーを保存する要求を支持	28
子ども博物館（オーストリア）	30
通信ミューズ（NO. 1-50）について	31
絡み合った残虐行為。日米同盟に関する新たな洞察	32
国際平和都市	33
平和構築の実践：実践者のための教科書〔東南アジア〕	34
INMP30周年記念ウェビナー冊子	35

INMPニュースレター編集チーム（英語版）

KYA KIM, 山根和代 KAZUYO YAMANE, ROBERT KOWALCZYK

日本語版編集：安齋育郎、山根和代

日本語翻訳：赤松敦子、寺沢京子、山根和代

スペイン語翻訳：イラチェ・モモイティオ・

アストルキア



# INMP

INTERNATIONAL NETWORK  
OF MUSEUMS FOR PEACE  
NEWSLETTER

ISSUE #39

## INMPについて

国際平和ミュージアムネットワーク（*INMP*）は、平和な世界の構築に尽力するミュージアムと関連プロジェクト、そしてそれらを支援する組織や個人のグローバルなコミュニティです。平和のための教育を推進し、平和の文化を構築し、地球規模の環境・平和を促進するために、平和のための博物館（および関連組織）間で知識、資源、素晴らしい活動を特定、共有、普及するために活動しています。

### INMP NEWSLETTER EMAIL

[inmp.news@gmail.com](mailto:inmp.news@gmail.com)

### INMP WEBSITE

<http://museumsforpeace.org>



@museumsforpeace



@museumsforpeace



@inmp\_museums\_for\_peace

## コーディネーターからの メッセージ

イラッチェ・モモイティオ・アストルキア  
乗松・岡・聡子（INMPコーディネーター）

### ウプサラでの素晴らしい会議

COVID-19の大流行により、平和のための博物館国際ネットワークのメンバーの多くが直接会う機会を得たのは、前回（2017年のベルファスト）から6年ぶりだった。2020年、日本で開催されるはずだった大会は、すべてオンラインで行われることになった。しかし今回、何年もの準備期間を経て、ウプサラ、とりわけジェスパー・マグヌッソン率いるフレデンスハウス・チームと素晴らしいウプサラの大学が、私たちを快く迎えてくれた。

3日間（8月14日、15日、16日）、朝早くから午後遅くまで、素晴らしいプレゼンテーションや基調講演、16のブロックに分かれたショート・プレゼンテーション、そして新しい地域や博物館、平和博物館プロジェクトを知ることができた。この3日間、発表者たち（オンラインおよびウプサラで）によって、今日の世界、社会、文化にとって非常に重要なテーマが取り上げられた。例えば、音楽と平和、演劇、平和のためのミュージアムにおける感情とその利用、芸術と平和、平和のための遺産、ミュージアムと持続可能性、現在と未来のための平和の番人、協力、文化間・宗教間の対話、平和のためのゲーム、人工知能とその展示や平和のためのミュージアムの活動における利用の可能性といったテーマである。

ウプサラをより深く知るためのガイドツアー、充実した企画展、ウプサラ城での夕食会など、補完的な活動もあり、私たちはとても安心した。

しかし、それでもまだ話すべきこと、分かち合うべきこと、議論すべきことはたくさんあった。ウプサラ城での甘く賑やかなお別れと、2026年8月にカナダ人権博物館（カナダ、ウィニペグ）にバトンが渡され、再び会って進捗状況やプロジェクトを共有する機会が与えられることを知り、今秋の選挙後にINMPを率いる新メンバー（執行部、諮問委員、様々な委員）の選挙を前に、私たちは満足している。私たち全員が、小さな蟻のように、世界のさまざまな場所で「平和のための博物館」のために働き続けましょう。

私たちINMPのコーディネーターも積極的に参加しました。私イラッチェ・モモイティオ・アストルキアは何度か出席したし、私乗松・岡・聡子は、残念ながら個人的に出席することはできなかったが、オンラインで出席し、3つの異なるプレゼンテーションに参加することができた。ウプサラ会議で使用されたバーチャル会議プラットフォーム、INVAJOを使うのは初めてだったが、対面参加とオンライン参加がシームレスに統合され、その効率性に驚かされた。INMPの皆さん、ありがとうございました！

## 第11回国際平和博物館会議の 報告 ルーシー・コルバック

LUCY COLBACK

2023年8月14日から16日まで、スウェーデンのウプサラで第11回INMP会議が開催された。フレデンス・フス（平和の家）が主催し、INMP理事会のメンバーであるジェスパー・マグヌッソンがコーディネートしたこのイベントは、バルセロナで開催された第7回大会の際にジェスパーが開催に関心を示していたため、数十年越しの実現となった。課外活動のピース・アンド・カルチャー・ウォーク、大会にちなんだ展示会、ウプサラ城でのクローキング・ディナーは大成功を収め、この場を借りて、このような素晴らしいイベントを創設し、スムーズに運営してくれたジェスパーとフレデンス・フスのチームに改めて感謝の意を表したい。



*Jesper Magnusson speaking at the 11th  
INMP Conference in Uppsala*

写真は、ジェスパー・マグヌッソン氏

大会実行委員会は、100を超えるプレゼンテーションの応募の中から約60に絞り込み、プログラムを見事にまとめた。講演者たちは、壮大なウプサラ大学本館に出席している者もいれば、オンラインで聴講している者もいる中、200人近い代表者たちに向けて、直接、あるいはデジタル上でそれぞれの見識を披露した。講演者と参加者を合わせると、37カ国が参加した。

基調講演は、戦争を止めるためにも、気候変動などの存亡の危機に立ち向かうためにも、共に取り組むべきことがたくさんあるという緊急性と、理解と協力を促進するために働くより広いコミュニティの一員としての私たちのネットワークによってもたらされる希望の両方で満たされていた。



*Clive Barrett speaking at the 11th INMP  
Conference in Uppsala* クライヴ・バレット氏

キャサリン・ジヨーステンの「平和のためのグローバル・アート・プロジェクト」は、そうした活動を象徴している。彼女が30年近く追求してきたこのプロジェクトでは、140カ国の人々が平和のためのアート作品を交換し合っている。



第37号に掲載された平和のためのグローバル・アート・プロジェクトの作品

個人的な取り組みだけでなく、英国のブラッドフォード平和博物館やオハイオ州デイトンの国際平和ミュージアムなど、最近、その影響力を拡大するために新たな施設を確保した博物館の活動についても聞くことができた。これらのエキサイティングな最新情報は、博物館がいかにして現代の観客にふさわしいものにリニューアルできるかを示している。日本の立命館大学にある国際平和ミュージアムも、同様のリニューアルを行っており、来館者に現代的な文脈で歴史について考えてもらうことで、静的な歴史展示以上のものを提供することを目指している。

参加者はまた、2019年に設立されたインパール平和博物館のような新しい博物館からも話を聞いた。この博物館は、第2次世界大戦の最も激しい衝突のひとつが彼らの土地で発生したとき、地元住民に与えた影響についてより深い理解を可能にする、段階的かつテーマ別の展示で、訪問者に場面を設定する壮大な仕事をしている。第2次世界大戦の戦闘から戦後までを紹介する2つの展示と、マンチウールの芸術と文化に焦点を当てた3つの展示がある。

ヘレン・アルフヴィドソン氏は、国立世界文化博物館の革新的でインタラクティブな博物館教育へのアプローチを紹介し、子どもから大人までが民主主義や、健全な市民社会を支える個人の役割についてより深く考えるようにデザインされた演習や展示について説明した。

世代間のトラウマに関する研究（Salma Albezreh）、平和への実践的なステップ（Mona Badamchizadeh）、アジア太平洋の戦場に対するヨーロッパの博物館のアプローチに対する批評（Xiaoxuan Chen）などを紹介した若い世代の講演者の話を聞いたことは、特に刺激的だった。

これだけ多くのセッションを網羅することは不可能であり、上記は、当ネットワークのメンバーや世界中の平和構築者たちが行っている素晴らしいインスピレーションに満ちた活動のほんの一例に過ぎない。2023年12月末日までビデオは視聴可能ですので、ぜひプログラムをご覧ください。ログインしてリプレイをご覧ください。

会議の最終セッションは、ウプサラから次回の会議開催地へとバトンタッチされた。ウィニペグ人権博物館が、第12回INMP会議の参加者を迎える。3人の代表者は、それぞれ先住民として、あるいは移民2世として、自分たちの文化や遺産について感動的に語り、継承される紛争や和解といった問題について、間違いなく示唆に富む掘り下げが行われることになるであろう場面を演出した。



INMP 国際会議の参加者

## 紛争に関する織物

ROBERTA BACIC AND BREEGE DOHERTY

この国際的なテキスタイル・コレクションは、紛争や人権侵害の要素に焦点を当てて記録した400点以上のアルピレラ、キルト、壁掛けを網羅している。アルピレラ（「ar-pee-air-ahs」と発音）はコレクションの中核をなす。手縫いのアップリケが施されたこの絵のテキスタイルは、チリのピノチェト政権時代（1973～1990年）に脚光を浴びた。

拘禁、強制失踪、拷問、経済的苦難が急増するなか、女性たちは独裁政権の暴力と抑圧の経験を分かち合うために集まった。そのような集まりは、しばしば秘密裏に行われた。女性たちは端切れと針と糸を使って、ヘシアンや麻布の裏に人権侵害の体験談を縫い付けた。これらのアルピレラの証言は、後に連帯グループを通じてイギリスや日本など様々な国々に伝わった。アルピレラは、独裁政権の現実を世界に知らせた。国とは異なる物語だ。

アルピレラの製作技術は、当初ペルーや中南米の近隣諸国の女性グループに広まった。その後、展覧会やアルピレラのワークショップを通じて、アルピレラはカタルーニャ、スペイン、イギリス、アイルランド、ドイツ、ジンバブエに広まった。主に女性が参加するこれらのワークショップでは、文化や地域が異なっても、切実な問題は驚くほど似通っている。

2007年以來、コンフリクト・テキスタイル・コレクションのコレクター兼キュレーターであるロベルタ・バチッチは、160以上の国際的なアルピレラの展示プログラムと関連イベントを企画してきた。これらの展覧会は世界中の博物館、大学、アートギャラリー、大使館、コミュニティスペースで開催されてきた。時を経て、これらの展覧会や関連イベントは、チリのピノチェト独裁時代のアルピレラから拡大してきた。キルトをはじめ、世界中の喪失、抵抗、証言、抗議のテキスタイルの物語を含むまでに発展した。その過程で、INMPとの貴重なコラボレーションを含め、いくつかの新しいテキスタイルやパートナーシップが生まれた。今回でINMPニュースレターへの寄稿は3回目となる。

コンフリクト・テキスタイルは、国際的なアルピレラの主要資料である。物理的なコレクションに加え、アルスター大学（UU）のCAINが開発・ホスティングするオンラインリポジトリにより、コレクションは世界的にアクセス可能になっている。

<https://cain.ulster.ac.uk/conflicttextiles/>

Conflict Textilesは少人数のチームで運営されている。2023年には正式に受託財団として設立された。アルピレリスタ、テキスタイル・アーティスト、地元コミュニティ参加者、学者、研究者、活動家、国境を越えたグループやネットワークからなる国内外のネットワークが、コンフリクト・テキスタイルズを中心であり続けている。

コンフリクト・テキスタイル・コレクションのアルピレラは表紙で紹介されている（p.3参照）。その他の作品は本号の8、18、25ページで紹介されています。







アルゼンチンのビデラ中将率いる軍事独裁政権（1976年～1983年）は、人権侵害、強制失踪、不法逮捕によって特徴づけられていた。国家失踪者委員会の報告書『Nunca Más（二度と繰り返してはならない）』（1984年）は、強制失踪やその他の人権侵害が9000件に上ると推定し、実際の数字はもっと高いと結論づけている。被害者の約30%は女性であった。拉致された妊婦は拘置所出産した後、一般的に殺害され、赤ん坊の多くは軍や政治家の家族の不法養子となった。

これらの残虐行為は、1977年に「プラサ・デ・マヨのアブエラ（おばあさんたち）」という、子どもや孫の失踪に焦点を当て調査する非政府組織の始まりとなった。

ここでは、このおばあちゃんたちが、プラサ・デ・マヨの政府庁舎前のオベリスクの周りを行進している。毎週木曜日、40年以上にわたって、彼らはこの行動を続けてきた。抗議し、愛する者たちの失踪を糾弾し、答えを求め。

このアルピレラとアルピレリスタについては、『Ausencias - Presencias 2』（2015年）で詳しく紹介されています。 [Ausencias - Presencias 2 \(2015\)](#)。

## ウィリアム・ケリー：芸術と平和の大使、そして芸術は銃弾を止めることができると思った男

IRATXE MOMOITIO ASTORKIA

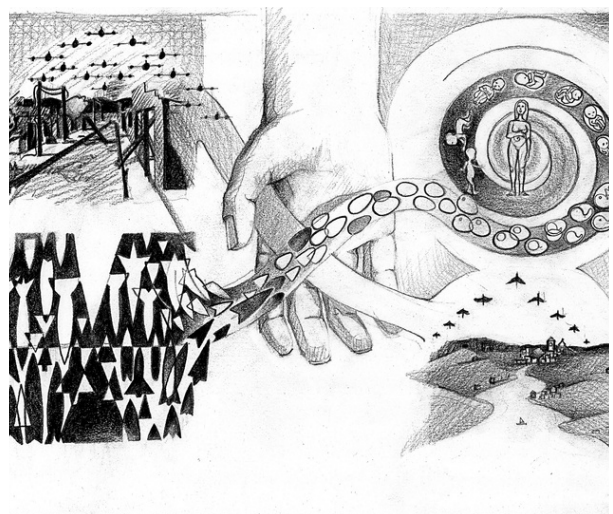


www.dailyfreeman.comからの画像

ウィリアム・ケリー（1943-2023）の芸術と平和の分野におけるプロフェッショナルなキャリアを要約することは非常に難しい。芸術家、芸術活動家、文化経営者、夫、父親、指導者、類まれな人間、そして友人達の友人。

ビル・ケリーは1943年、アメリカの産業スラムに生まれ、そこでは多くの若者たちが暴力的なギャングに属するのが普通だった。しかし彼の場合、その真ん中にアートがあり、アートと平和が彼の生涯を彩った。フィラデルフィア・カレッジ・オブ・アート（現芸術大学）とメルボルンのナショナル・ギャラリー・スクールで美術を学び、メルボルンを拠点に活動していた。1970年代半ばには、ビクトリア芸術大学の学長に就任。1975年には早くも妻と家族とともにオーストラリアに移り住み、新しい住まいとして、また彼を迎えてくれた地域社会に多大な貢献をした。

ウィリアム・ケリーは世界各地を訪れ、仕事をした。その多くは、広島、ゲルニカ、北アイルランド、南アフリカなど、無分別な暴力によって悲惨な傷跡を残した場所だった。芸術と平和、ヒューマニズム芸術という彼のビジョンに基づいて、これらすべての場所に学校を作った。彼は1990年代後半にゲルニカを訪れ、パブロ・ルイス・ピカソが描いた象徴的な村との関係は亡くなるまで続いた。ケリーはゲルニカ平和博物館と文化会館でいくつかの展覧会（「和解に向かうアート」2000年、「ヒューマニスト・アート」2003年、「象徴的な場所」2003年）を開催した。2003年以来、ゲルニカで年2回開催される「アートと平和の集い」を立ち上げ、協力。彼の芸術的パフォーマンス「平和をつくる人々の広場での火と光」（2001年）と「火と光の広場でのスピリチュアルな人物：平和の通路」（2005年にゲルニカで開催された第5回国際平和博物館会議で上映）は、私たちの町における芸術と平和の関係を理解する上で、これらは前奏曲とエピローグにあたるものとなった。



William Kellyのスケッチ

マーク・ストリートは、ウィリアム・ケリーの芸術と人生の旅を、ドキュメンタリー映画『Can Art stop a bullet? 芸術は銃弾を止めることができるのか?』で示した。

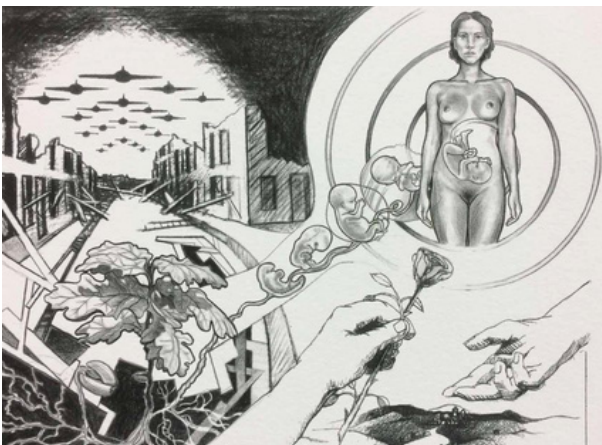
<https://youtu.be/l6ATDQlOoPo>

ウィリアム・ケリーは、「アートは平和のために私たちをひとつにする助けになる。芸術作品や演劇、映画が銃弾を止めることができるのかということを実証する術は私にはありません。しかし、アートのように世界を変える助けとなるものを見つけると、より思いやりをもって考え、より愛情をもって行動することができる。私は、アートにはその力があると信じている。アートは銃弾を止めることができると信じています」と述べたことがある。

2021年、ウィリアム・ケリーは、INMP主催の「アートと平和」ウェビナーで、「コラボレーションと結果」というプレゼンテーションを行った。

<https://inmp-gallery.museumsforpeace.org/art-peace-webinar>

アーティヴィズムの世界、平和の世界、平和ミュージアムの世界は、美しい人間を失いました。アートが平和のためにできるすべてのことの大使として、多くの場所で、とりわけ世界中の平和ミュージアムで活躍しました。



William Kellyのスケッチ

ビル（ウィリアムの愛称）、安らかに眠ってください。あなたの光、あなたの作品は、私たちにいつもあなたを思い出させてくれるでしょう。

イラツェ・モモイティオ・アストルキア  
Iratxe Momoitio Astorkia  
ゲルニカ平和博物館館長  
INMPコーディネーター



Iratxe Momoitio Astorkiaによる写真



Iratxe Momoitio Astorkiaによる写真

## ブラッドフォード平和博物館が 移転します！

CLIVE BARRETT

ブラッドフォード（英国）の平和博物館が、素晴らしい新しい場所でより広々とした新施設に移転します。以前は市内中心部の見つけにくいビルの狭い最上階（エレベーターなし）にあり、コロナ以来一般公開されていませんでした。このたび博物館は、ブラッドフォード郊外、ユネスコの世界遺産に登録されている19世紀のモデル村、サルタイアのサルツ・ミルに移転することを発表しました。サルタイアに関するユネスコの短いビデオをご覧ください。

<https://whc.unesco.org/en/list/1028/video>

### サルテア

サルテア村は、ブラッドフォードの織物製造業者、政治家、慈善家であったタイタス・ソルト卿（1803～1876）が創設しました。1850年代、彼は煙の出る工場の煙突や過密労働による公害や健康問題から逃れるため、事業と労働者を市外に移転させました。彼は巨大な織物工場を建設し、労働者のために住宅、病院、教会、その他の施設を備えました。後に公園も作られました。ユネスコはそのすべてを、"調和のとれた様式で建てられ、建築の質が高く...19世紀半ばの博愛主義の傑出した例である"と評しています。



サルタイアのサルツ・ミルは、平和博物館の新しい拠点となります。写真：Clive Barrett

日本の読者には、明治政府の近代化・工業化に先立ち、岩倉使節団（1871-72年）がサルテアを訪れ、西洋諸国を視察したことが興味深いと思います。

### サルツ工場

1980年代、当時は空き家だったこの大きな工場は、アートと商業の活気あふれる場所へと生まれ変わりました。常設展示の中には、ブラッドフォード生まれのアーティスト、デイヴィッド・ホックニーの絵画や素描が多数あります。ソルツ・ミルは、工場だけでなく、村、公園、川、運河を合わせたアトラクションを楽しむために、年間約50万人の観光客を迎えています。



タイタス・ソルトとソルツ・ミルの内部。

写真：Clive Barrett

### ソルツの平和博物館

ピース・ミュージアムのパブリック・ギャラリーとして、製粉所が操業していた時代から使われていなかった、ひとつの大きなスペースを使用します。博物館のユニークな平和の遺物コレクションは、すでに別の場所に移されています。ギャラリーを博物館の水準に近づけるための作業と、新しい展示の設計と設置には、さらに12ヶ月を要します。ソルツ・ミルの平和博物館は、2024年夏の終わりにオープンする予定です。新しいギャラリーの様子は、こちらのビデオをご覧ください。

[https://www.youtube.com/watch?](https://www.youtube.com/watch?v=b3gVnWNF-Kw)

新施設は、平和の遺物コレクションからさらに多くの宝物を展示し、平和の歴史から多くの新しい物語を伝える素晴らしい機会となるでしょう。

館内はバリアフリーとなっており、入場料はこれまで通り無料です。これだけ多くの人を訪れると、来館者数は年間5万人が現実的な見込みです。来館者の大半は、平和の歴史や平和の物語をまったく知らない人たちでしょう。博物館にとって、平和教育において真の影響を与えるわくわくするような機会となるでしょう。

2025年、ブラッドフォードは英国の「文化都市」になるでしょう。メディアはこの街にスポットライトを当て、特にサルツの平和博物館にスポットライトを当ててほしいでしょう。多くのメディアに取り上げられることを期待しています。わくわくするような時なのです

クライヴ・バレット Clive Barrett,  
評議委員長  
ブラッドフォード平和博物館



サルタイア：リーズ・リヴァプール運河。  
写真：Clive Barrett

## 地上の平和：INMP会員からの宝物

INMP 活動・プロジェクト・イベント  
ワーキンググループ

地上の平和：2023年8月13日、ウプサラのブレッドグレンド6で開催されたウプサラ会議で、INMP会員によるポスター展「INMP会員からの宝物」が開催された。この展覧会は、INMPの活動・プロジェクト・イベントワーキンググループが主導した平和遺産に関する国際研究プロジェクトの一環で、積極的な平和、平和遺産、そして平和のためのミュージアムがより平和な世界の実現に向けてどのように貢献できるかについて、より幅広い理解を深めることを目的としている。「ピース・ヘリテージ（平和の遺産）」と題されたこの展覧会では、INMPメンバーからの宝物が展示される。



*The exhibition venue in Uppsala*

「INMP会員からの宝物」と題し、INMP会員から作品を募集したところ、インド、日本、スペイン、英国、スイス、ウクライナ、イラン、ケニア、スウェーデン、米国など、世界各国から作品が寄せられた。2023年5月から6月にかけて27点の応募があり、その中から20点が選ばれ、ポスター展として展示された。長崎への原爆投下を免れた平和の鐘から、インドの画家による現代絵画まで、その内容は多岐にわたった。それぞれのポスターには、平和に関連する品々の写真と説明文、そして考察が掲載された。これらの展示は、INMP会員の目を通した平和遺産に関するユニークで多様な視点を提供した。

ポスター展で展示されたものは、歴史的な遺物から現代的なものまで、有形・無形を問わない。その目的は、これらの宝物が現在進行中の前向きな平和プロセスにいかに関与しているかを説明することにあった。展示は、先住民の平和遺産の伝統、社会正義、アヒムサ（非暴力）、人権または市民権、共通基盤の発見、平和構築、平等、紛争後の癒し、和解など、さまざまなテーマに焦点を当てた。



*A photo of the exhibition*  
展示の写真

これらのテーマを探求することで、この展覧会は、積極的な平和の推進における平和遺産の役割について、より深い理解と認識を育むための対話と考察の場を提供した。

この展覧会は、異なる文化や個人のユニークな視点や貢献を強調することで、平和遺産に対する理解を広げようとするものであった。この展覧会は、観客が平和遺産に対する自らの理解を見直し、今日の世界の課題に取り組む上で平和博物館が何を提供できるかを探る機会となった。

展覧会に加え、INMPの活動・プロジェクト・イベントワーキンググループは、平和遺産をテーマとした本の出版にも取り組んでいる。年末に出版が予定されているこの本では、平和遺産の概念と意義をさらに掘り下げ、さまざまな博物館や個人からの寄稿やケーススタディを掲載する

このプロジェクトにオブジェの紹介で貢献したいとお考えの方は、[inmp.projects@gmail.com](mailto:inmp.projects@gmail.com) までメールをお送りください。

あなたのご寄稿は、平和遺産を理解し、平和遺産と積極的な平和との関わりを形成する上で、平和遺産とその役割の継続的な探求への貴重な追加となることでしょう。



展示を見る大会参加者

## 大島博光記念館アルピジェラ展 2023「チリ軍事クーデター50 年—1973.9.11を忘れない」

酒井朋子・大島朋光

1973年9月11日、チリでアウグスト・ピノチェト率いる軍事クーデターが起こり、民主的選挙で選ばれたアジェンデ政権を転覆させました。日本の長野県にある大島博光記念館では現在、このクーデター50周年を記念する展覧会が開かれています。展示の中心は、サンティアゴの貧しい女性たちが作成したアルピジェラと呼ばれる壁かけです。古布や様々な素材の切れ端を縫い合わせて作られたものです。

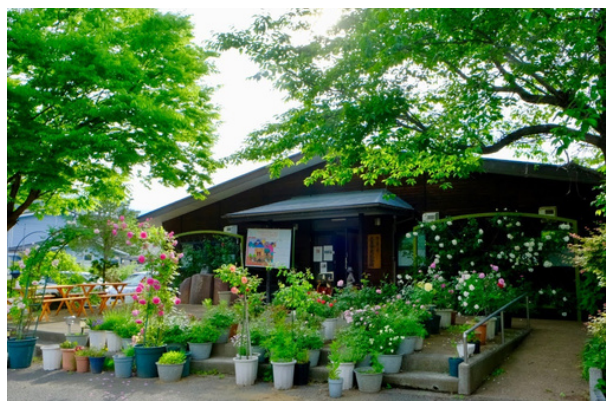


大島博光記念館 展示室

クーデター後、1990年まで続いたピノチェト軍事独裁政権は、多くの人権侵害をおこなったことで知られています。拉致され行方不明となったり、拷問を受けたり、違法に処刑された人々は少なくとも数千人に及びます。また軍事政権はきびしい検閲制度をもうけ、批判的な意見を封じこめました。貧困層の人びとは、新自由主義的で競争主義的なその経済政策によっても苦しめられました。

アルピジェラは軍事独裁政権の初期に作られはじめ、作り手らの毎日の生活の困難や抵抗運動などを、アップリケや刺繍の技法で視覚・触覚イメージにうったえかけつつ表現しています。コミュニティが組織する共同なべ（炊き出し）や、行方不明者の家族がかかわった街頭行動などは、頻繁に描かれる内容です。民政移管後も経済的下層の人々は格差に苦しめられ、アルピジェラもまた作られ続けました。

大島博光記念館は長野県松代町にある私設博物館で、この町に生まれた詩人でありフランス語／スペイン語文学者・大島博光（1910-2006）の作品と活動を記念して2008年に開設されました。大島博光はチリ人民連帯日本委員会のメンバーでもありました。記念館は約120点のアルピジェラ作品を所蔵しており、その多くは、連帯委員会のメンバーの一人であるラテンアメリカ研究者・高橋正明氏により寄贈されたものです。また記念館は、政治暴力のテキスタイル・コレクションであり、そのオンライン・アーカイブを運営するコンフリクト・テクスタイルズ（北アイルランド）との協力関係を築いてもきました。その関係は、コンフリクト・テクスタイルズのキュレーターとなるロベルタ・バチチ氏が記念館を研究訪問し、所蔵アルピジェラの調査をおこなった2012年にまで遡ります。



大島博光記念館

今回の「1973.9.11を忘れない」展は、2013年以来大島博光記念館が開催してきたアルピジェラ展の8回目にあたります。博物館が所蔵するアルピジェラのうち20点のほか、コンフリクト・テクスタイルズから貸与された作品「さようなら、ピノチエト！」(<https://cain.ulster.ac.uk/conflicttextiles/search-quilts2/fulltextiles1/?id=32>)を展示します。関連イベントとしては、「没後50年パブロ・ネルーダ展」が併設されるほか、2023年9月10日にシンポジウム「チリ軍事クーデター50年を記念する講演と歌の集い」がサンホールマツシロ（長野市松代町松代163-9）にて開催されます。ロベルタ・バチチ氏（コンフリクト・テクスタイルズキュレーター）、酒井朋子（京都大学人文科学研究所准教授）、伊藤千尋氏（ジャーナリスト、「九条の会」世話人）が登壇します。

「チリ軍事クーデター50年——  
1973.9.11を忘れない」展

会場：大島博光記念館（長野市松代町  
清野 2567-1）

期間：2023年5月~12月28日  
10:00~16:00（月・火休館） 入場無料

詳細は以下をご覧ください。

<https://cain.ulster.ac.uk/conflicttextiles/search-quilts2/fullevent1/?id=305>（英語）

<http://oshimahakkou.blog44.fc2.com/blog-entry-5535.html>（日本語）



Arpillera "11th September, 1973, Santiago de Chile", anonymous, 1990  
「1973年9月11日チリのサンティアゴ」 © Oshima Hakko Museum



## エルサレムのアルバート・ アインシュタイン博物館

PETER VAN DEN DUNGEN

およそ10年前の2014年11月、ニュースレター（第9号）は「アルバート・アインシュタイン博物館プロジェクト」について報告した。2012年、イスラエルの閣議は全会一致で、エルサレムのヘブライ大学にこのような博物館を建設し、2017年の開館を目指すことに合意していた。プロジェクトは中断していたが、2022年10月、イスラエル政府は、アルバート・アインシュタインが創設に貢献した大学に、彼の遺産に特化した1800万ドルの博物館を設立する計画を承認したと発表した。博物館は、市の中心部にある重要地区、ギヴァット・ラムにある同大学のサフラ・キャンパスに建設される。資金の3分の1は政府から拠出され、残りは大学と民間の寄付者から拠出される。民間寄付者のなかでも著名なのは、イスラエルの億万長者でニューヨーク在住のアートコレクター（アンディ・ウォーホルの作品が専門）であるホセ・ムグラビ氏である。

<https://www.jta.org/2022/10/24/israel/israel-to-build-a-museum-dedicated-to-albert-einstein-at-university-he-helped-found>、および

<https://www.jpost.com/israel-news/culture/article-720322>、および

<https://www.afhu.org/2022/10/24/new-albert-einstein-museum-to-be-built-at-hebrew-university/>。

このプロジェクトは、イスラエルのエルサレム問題・遺産省とヘブライ大学による共同事業である。博物館には、アインシュタインの全アーカイブを収蔵する施設が含まれ、一般市民がデジタル形式でアクセスできるようになる。また、科学技術教育のための革新的なスペースとしても機能する。来館者は、プリンストンにあるアインシュタインの書斎とオフィスを再現したものを見学し、彼のオリジナル論文のいくつかを見ることができると書かれている。

この博物館が主要な観光スポットになることが期待されている。アルバート・アインシュタインの軍国主義や戦争に対する絶え間ない努力、世界平和、世界政府、軍縮に対する情熱に、博物館がどの程度注目するかは未知数である。この科学者の伝記の重要な部分は、彼の秘書であり遺言執行人であったオットー・ナタンが（ハインツ・ノルデンとともに）編集した『アインシュタイン・オン・ピース』（1960年）という700ページにも及ぶ本に完全に記されている。

エルサレムのもうひとつの新しい博物館、寛容博物館についての困難と論争は、1年前に報告された。壮大な建物であるが、その目的と内容については長い間不明確であった。ロサンゼルス市の「寛容の博物館」がホロコーストを主なテーマとしているのとは異なり、エルサレムの同じような名前の博物館は、ヤド・バシェムの要求に基づいて、同じような焦点を持っていない。博物館というよりも、この建物は主にカルチャーセンター、コンベンションホール、エンターテイメント会場、都市広場として機能する。この建物で開催された最初のイベントは、トランプ政権時代の米国の駐イスラエル大使の名前にちなんだ「[デイヴィッド] フリードマン平和センター」の設立を記念する式典だった。当然のことながら、このことが「博物館」が右翼的な施設であるというイメージを助長した。センターの正式名称を明らかにしよう。「力による平和のためのフリードマン・センター」である。むしろ不釣り合いなことに、センターのミッション・ステートメントには、預言者イザヤのビジョンである「民族が民族に対して剣を振り上げることも、戦争を学ぶことも、もはやない」を追求していると書かれている。

参照：<https://www.thefriedmancenter.com/>



2015年にエルサレムのヘブライ大学サフラ・キャンパスで除幕されたゲオルギー・フラングリアン作のアルバート・アインシュタイン像  
(写真クレジット: *Times of Israel*)

**La lucha continúa / The struggle continues** 闘いは続く。

English arpillera, Linda Adams, 2010

Conflict Textiles collection

Photo Martin Melaugh, © Conflict Textiles



チリ南部のアラウカニア地方に住む先住民マプチェの歴史を調査するなかで、リンダは彼らが500年以上にわたって、最初はスペイン人入植者の手によって、その後はチリ国家によって、抑圧と植民地化に耐えてきたことを知った。土地闘争とかつての土地の返還要求は、先住民マプチェにとって現在進行中の問題である。彼らにとって、土地なしで生きることはアイデンティティの否定である。マプチェとは "土地の民" という意味である。

リンダは、2010年に34人のマプチェの農民が土地を守るために行った81日間のハンガーストライキが終わったとはいえ、彼らの問題は解決しておらず、土地闘争は続いていると警告する。

この作品において、彼女の素材選びは極めて意図的である。彼女はこう語る。「起こった出来事を描いているわけではないので、意図的にリサイクル素材は使っていません。この物語は続いていくし、変化していくかもしれない。だからこそ、この作品は未完成のままなのです。」

このアルピレラとアルピレリスタについては、 [La lucha continúa \(2010\)](#) をご覧ください。

## 八重山平和祈念館（沖縄県平和祈念資料館八重山分館）

分館長 比嘉 丞

八重山平和祈念館（沖縄県平和祈念資料館八重山分館）は、「戦争マラリア」の実相を後世に正しく伝えるとともに、人間の尊厳が保障される社会の構築と八重山地域から世界に向けて恒久平和の実現を訴える「平和の発信拠点」の形成を基本理念とし、1999年に設立されました。

当館常設展示では、①アジア・太平洋戦争に起因する沖縄戦 ②沖縄戦と八重山 ③戦争マラリアの悲劇 ④マラリア根絶に向かって ⑤戦争マラリア援護会の活動 ⑥八重山地域における平和発信拠点を目指しています。

また、年3～4回程度実施する企画展示では、戦争の歴史や平和に関するテーマに沿って関連資料を展示しています。

そのほか、①教育機関、団体、企業の平和学習受け入れ ②八重山地域内教育関係者への当館利用に係る説明会の実施 ③沖縄県平和祈念資料館にて募集・展示した県内児童・生徒からの平和メッセージ作品（図画・作文・詩）の出張展示の開催 ④所蔵資料や関連資料の貸出等といった教育普及活動や八重山地域における沖縄戦（戦争マラリア）等に関する資料の収集及び保存活動を行っています。

住所：〒907-0014 沖縄県石垣市新栄町79-3

TEL：0980-88-6161 FAX：0980-88-6161

Email：yaeyamaheiwa-mararia@basil.ocn.ne.jp

ウェブサイト：

<https://www.pref.okinawa.jp/yaeyama-peace-museum/>



外観 Yaeyama Peace Memorial Museum



展示室

Yaeyama Peace Memorial Museum

## 伊陸ロンサムレディ号 平和記念館

館長 武永昌徳

1945年7月28日、呉（旧帝国海軍港）を空襲した爆撃機B-24 Lonesome Lady号は、迷走の果て山口県柳井市伊陸に墜落しました。乗員9名はパラシュートで脱出しました。1名、墜落死。1名、降下後8日間山中へ隠れており、その後捕虜となり終戦後母国へ帰国。そして残りの7名は、降下後に捕虜となり広島の中隊司令部へ護送。その内の1人、機長のトーマス・カートライトは、重要参考人として東京へ送られたのち、戦後アメリカへ帰国しました。

広島に残った6名は、中国憲兵隊司令部に収監中、1945年8月広島に投下された原子爆弾により被爆死しました。米兵が被爆死したことは、長い間秘密とされていました。この事実は、ご家族へも知らされておりました。広島で被爆死した米兵捕虜について40余年に渡り地道に調査研究を重ねてきた森重昭さんは、伊陸へ調査のため何度もお越しになられておりました。自らも被爆者でありながら、被爆死した方とご家族へ寄り添い思い埋葬の手続きを、何の見返りも求めず私財を投入し、突き進んでこられた方です。

私は、そのことを文藝春秋の記事で知ったと同時に私の母らの世代が昔、「伊陸の平和の碑」の設立や森先生と機長のトーマス・カートライトさんとが一緒に伊陸へ再訪し交流をなされた記憶などが甦りました。これを機に森先生と私の交流が始まります。そして、この時期に、森先生のドキュメンタリー映画（Paper Lanterns）の撮影時期とも重なり先生とは、次第に交流が深くなっていきました。



伊陸ロンサムレディ号平和記念館

第二次世界対戦は、尊い人々の命が無惨にも失われました。この戦いから70年以上が過ぎた今日、世界では混迷と混沌が未だに拭えません。私は、森重昭先生とLonsome Lady号機長のトーマス・カートライト氏との長年にわたる交流の記録は、日米間だけでなく各国々の相互理解と信頼の上になり立つ平和の希求の手法として、世界に発信すべき事例となると確信し記念館の設立に至りました。記念館はまだ未完成です。みんなで育てる記念だと思っています。ここであった事実を学び合い、好転的な繁栄と繋がりへと広がるようお願いも込めて。よろしくお願いたします。

Facebook:

[https://www.facebook.com/ikachilonosomeseladypeace.memorial.base.B24/?locale=ja\\_JP](https://www.facebook.com/ikachilonosomeseladypeace.memorial.base.B24/?locale=ja_JP)



伊陸ロンサムレディ号平和記念館

## 「あなたも平和のヒーローになれる」展

ARYA AKHOUNZADEH AND HEDIEH HOSSEINI

"You Can Be a Peace Hero, Too (あなたも平和のヒーローになれる)"は、オーストリアを拠点に活動する2人のイラン人アーティスト、アーリヤ・アクフンダーデとヘディ・ホッセイニが制作した魅惑的なアートインスタレーションです。このインスタレーションは、スウェーデンのウプサラで開催された第11回国際平和博物館会議のために特別にデザインされました。過去と未来の平和のヒーローを象徴する2体のプレキシグラスの像で構成されています。



平和のヒーローの原型

ポジティブ・スペースにある最初の像は、過去の平和の英雄を表しています。この像は、世界の平和を促進するために生涯を捧げた人々に起因していて、彼らが社会に与えた影響を思い起こさせる役割を果たします。プレキシグラスで作られています。



この像の前には、ネガティブ・スペースに描かれた2番目の像があります。未来の平和のヒーローを象徴していて、意図的にネガティブ・スペースに作られているのです。物理的な形がないことで、平和のヒーローになる可能性が各個人の中にあることを表しています。一人ひとりの行動によって、未来に平和が達成されるという希望と信念を表していて、平和のヒーローになるには、名声も並外れた能力も必要ないことを証明しています。

参加者がこの2つの人物の間に立つと、過去と未来の平和のヒーローの間に位置することになります。この位置づけによって、参加者は自分が次の平和のヒーローであり、世界にポジティブな影響を与えることができると考えることができます。



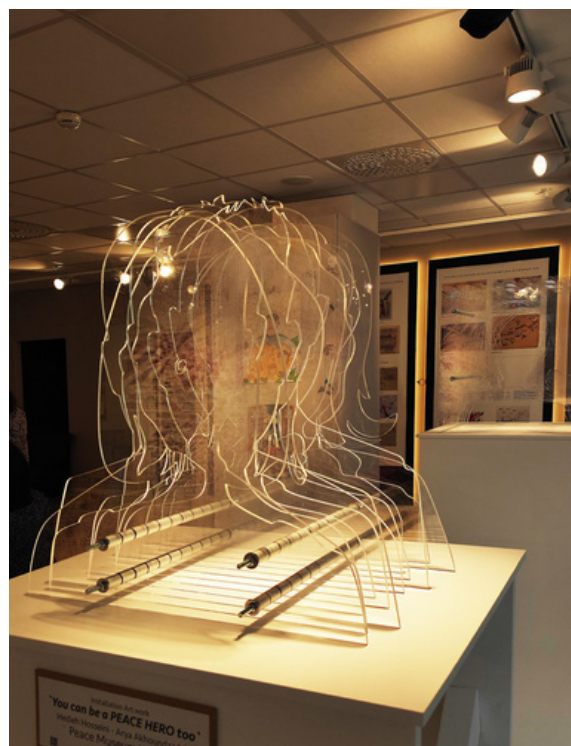
「あなたも平和のヒーローになれる」

インスタレーションのクライマックスでは、参加者は自分の感情を振り返り、経験を共有するよう促されます。作品の相互作用的な側面は、参加者が平和のヒーローになるというコンセプトとのつながりを深めるのに役立ちます。来場者が対話に参加して、感情を共有することで、未来の平和のヒーローになる自分を想像することについて、どのような感情を抱くかを知ることが、作家は目指しています。

「You Can Be a Peace Hero, Too (あなたも平和のヒーローになれる)」は、来場者に平和を推進する上での自分の役割について考えることを促す、示唆に富んだインスタレーションなのです。

二つの像の力強い象徴性と参加型のインスタレーションを通じ、アーヤ・アクハウンドザデとヘディエ・ホセイニは、参加者に平和のヒーローとしての可能性を受け入れ、小さな行動で平和に貢献するよう促しています。

翻訳：寺沢 京子



「あなたも平和のヒーローになれる」

## 秘密の戦争：ラオスの 不発弾

KEVIN KELLY ケビン・ケリー：デイトン  
国際平和博物館館長

2023年は、ラオス、カンボジア、ベトナムと関係のある米国の地域共同体にとって歴史的に重要な年です。この年は、最後のアメリカ軍がベトナムを撤退してから、50年目にあたります。

また、ラオスとカンボジアに最後の爆弾が投下されてから、そしてパリ和平協定が調印されてからも半世紀経ちます。この秋、デイトンの国際平和博物館は、この紛争の永続的な影響を浮き彫りにし、現在のウクライナ戦争との関連性を描く特別展を開催します。



不発弾のイメージ

by Dayton International Peace Museum

2023年8月11日から、当平和博物館で、その展示「秘密の戦争：ラオスの不発弾」の会期が始まります。デイトン大学人権センターと擁護団体「戦争の遺産」"Legacies of War"との協働により制作されたこの展示では、他では公開されたことのない画像と遺物で、1960年代から今日に至るまで、

多くの命を奪ってきた東南アジアにおける戦争の影響を示しています。ラオス人、モン族、紛争監視団のアメリカ人、そして紛争に直接参加した人々が語った、聞く人の心を揺り動かす証言は、紛争中に下された戦術的な決定が意図しない結果をもたらしたことを明らかにしています。最前線の写真や目撃者の絵は、この地域の被害の大きさを示しています。この被害は、戦闘が終結した半世紀後もまだ続いているのです。

この展示は、こうした知られざる歴史に光を当てるだけでなく、クラスター爆弾や地雷といった無差別兵器を現在の紛争で使用する事の危険性についての洞察も提供しています。当平和博物館は、学校の見学団体、退役軍人、政府関係者、そして平和を望むすべての友人の皆様をこの展示にご招待いたします。この展示は、ウクライナ、イエメン、その他の紛争地域で人々の命を奪っているこれらの武器を調査し、その影響をどのように軽減できるかを議論することも目的としています。

9月7日から9日まで、紛争を生き延びた人々、ジャーナリスト、人道活動家を招いた一連の特別行事を予定しています。9月7日（木）には、「戦争の遺産」のディレクターであるセラ・クラブダラ氏が、クラスター爆弾の被害修復を提唱するラオス系アメリカ人としての10年間の経験についてギャラリートークを行う予定です。9月8日（金）には、クラブダラ氏とケビン・ケリー館長によるレセプションと記者会見を開催いたします。この行事では、展示内容とウクライナにおけるクラスター爆弾の現在の影響について話し合う予定です。

9月9日（土）には、ジャーナリストのジョージ・ブラック氏が新著『長く受け続ける報い』"The Long Reckoning"について語ります。

この著書は、ベトナムでの戦争、平和、そして贖罪の物語です。これらの行事に参加された方は、ミュージアムに展示されている展示物の出典である『突然の衝撃を与える平原からの声』"Voices from the Plain of Jars"や、ブラック氏の著書を購入することができます。

すべての行事は無料で一般公開されています。



Legacies of War 代表  
Sera Koulabdara



George Black,  
The Long Reckoningの著者

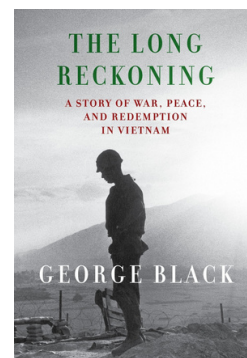
8月11日～10月7日：「秘密の戦争：ラオスの不発弾」展は国際平和博物館（10 N. Ludlow St., Dayton, Ohio 45402）で開催されます。

2023年9月7日午後7時「戦争の遺産」の理事長、セラ・クラブダラ氏が、1960年代から1970年代にかけてのラオスにおける秘密戦争と、現在も民間人を殺傷し続けているクラスター爆弾の影響から生まれた遺品、美術品、写真などの展示物を解説するギャラリー・ウォークを開催します。

2023年9月8日午後2時～5時：セラ・クラブダラ氏とケヴィン・ケリー館長が記者会見に出席し、この展示のテーマ、展示物、ウクライナにおけるクラスター爆弾の使用に関する新たな懸念について語ります。レセプションと館内案内も開催します。

2023年9月9日午後2時『長く受け続ける報い』の著者ジョージ・ブラック氏による新著についての講演、サイン会、質疑応答を実施します。デイトン大学人権センターのポール・モロー博士がブラック氏と共に、過去の歴史的イベントと、現在進行中のウクライナ戦争におけるクラスター弾使用の決定との関連について語ります。

翻訳：赤松敦子



お問い合わせ先 ケビン・ケリー（国際平和博物館館長、デイトン、オハイオ州45402、米国）。電話：937.397.4695 またはEメール：  
[kevin@peace.museum](mailto:kevin@peace.museum)  
博物館住所：10 N. Ludlow St. Dayton, Ohio,  
45402 USA



**They Fell like Stars from the Sky** / Cayeron del cielo como estrellas

彼らは空からの星のように落とされてきた。

Republic of Ireland arpillera, Deborah Stockdale, 2013

Conflict Textiles collection

Photo Martin Melaugh, © Conflict Textiles



このアルピレラの中でデボラは、1976年から1983年のビデラ独裁政権時代にアルゼンチンで失踪した推定3万人の人々を追悼している。

夜空を落ちていく人物は、それぞれ小さな赤いハートを持っており、飛行機から投げ落とされた、時にはまだ生きていた遺体を表している。女性たちの輪は、マヨ広場のアブエラ（祖母）たちであり、失踪した愛する人たちを見守り続けている。中央のエリア（「水」のエリア）と裏面には、テーブルクロス、写真、手紙など、具体的な記憶が封じ込められている。これらは、1970年代に「失踪」したミゲル・アンヘル・デ・ブールの若い妻、医学生マリア・ハイデ・ラブニャルのものである。

これら3つの柱を統合することで、デボラは「アルゼンチンの人々にとってのこの悲劇の疑う余地のない規模を理解する方法」を得たのである。

詳細は [They Fell like Stars from the Sky \(2013\)](#) でご覧ください。

## 「ノー・モア・ヒロシマ： ノー・モア・ナガサキ：平和 展」をインドで開催

BALKRISHNA KURVEY

2023年8月6日から9日まで、ノー・モア・ヒロシマ：ノー・モア・ナガサキ：平和展」をインドで開催しました。

以前にも、インドに被爆者の方にご来場いただきセミナーを開催したことがあります。私は広島と長崎を訪れ、会議に参加したこともあります。

日本被団協と広島平和記念資料館は、広島・長崎の原爆関係の写真を私たちの団体に寄贈してくれました。

私たちの団体、インド平和軍縮環境保護研究所が、ノー・モア・ヒロシマ、ノー・モア・ナガサキ：平和博物館をインドの中心部にあるナーグプル市に設立しました。また、「ノー・モア・ヒロシマ、ノー・モア・ナガサキ：平和展」も開催しています。この平和展はインドの他の多くの都市でも開催しました。

私たちの平和博物館を訪れた医師から、核兵器のない世界のために医学界の仲間はどうのような支援ができるのかという質問を受けました。私はそれについて研究し、「核兵器のない世界と医学界の役割」という記事を執筆しました。

この記事は2023年8月6日付の日刊全国紙"HITAVADA"に掲載され、インド医師会、インド女性医師会、多くの医師、その他の方々から多くのコメントと感謝の言葉をいただきました。

翻訳：赤松敦子

Dr Balkrishna Kurvey は、インド平和軍縮・環境保護研究所理事長、「ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ平和展」名誉事務局長：ノーモア・ナガサキ：平和展」の名誉事務局長。



Photo: Balkrishna Kurvey



Photo: Balkrishna Kurvey



Photo: Balkrishna Kurvey

## ピースヒロイン

EDITED BY PETER VAN DEN DUNGEN

2016年に設立されたHerstoryは、女性のロールモデルに光を当て、祝福する多領域のストーリーテリングプラットフォームである。以下の記事はそのウェブサイトから。

<https://www.herstory.ie/home>

2023年にベルファスト／グッドフライデー協定25周年を迎えるにあたり、Herstoryは国立博物館NI（北アイルランド）およびアイルランド共和国外務省和解基金と提携し、アーティストFRIZによる平和のヒロインたちの素晴らしい新しい肖像画を展示する巡回展と、パワーを探求する青少年ワークショップを特徴とする「平和のヒロイン」教育プログラムを立ち上げた。

北アイルランドの和平プロセスにおいて、さまざまな立場の女性たちが極めて重要な役割を果たし、今日も地域間の対話や和解プロジェクトが続けられている。並外れた勇気を持つ普通の女性たちは、自分たちの生活や家族の生活を脅かす日々直面した。貧困や貧しい教育、個人的な悲劇との闘いを乗り越え、和平のために協力し合った女性も多い。彼女たちは、宗派間暴力の被害者の支援から政治家への働きかけ、統合教育の設立、地域横断プロジェクトの開始、大規模な平和行進の組織化、政治や公的な場に参加する女性の鼓舞まで、あらゆることを行った。

このプロジェクトは、2019年に国連で行われたタイムリーな会話がきっかけとなった。Herstory CEO兼プロジェクト・キュレーター メラニー・リンチはこう説明する。「ジェラルディン・ネイソン＝バーン駐国連アイルランド大使に会ったとき、彼女は北アイルランド和平プロセスにおける女性の役割が国連の重要なケーススタディである」と説明してくれました。学校に問い合わせたところ、北アイルランドでも共和国でも、この重要な物語が公式のカリキュラムで教えられていないことを確認した。

私たちの新しい「平和のヒロイン」プロジェクトは、この状況を変え、学生や一般の人々に伝説的な活動家たちを紹介し、次世代の平和構築者たちを鼓舞することを目的としている。今こそ、彼女の物語を歴史に刻む時なのです」。ピース・ヒロインズは、2022年9月21日の国際平和デーに、パトリシア・オリンMLA博士によって、北アイルランドのストーモント議会（ベルファスト）で発表された。

この展覧会は、今日私たちが享受している平和の創造に貢献した女性たちのほんの一部です。私たちはもっと多くのストーリーを共有したいと思っています。私たちはどのような声を聞く必要があるのでしょうか？ 誰の物語が欠けているのか？ あなたの地域の平和のヒロインを称えるプロジェクトを立ち上げてください。また、彼女のストーリーをEメールで送ることもできます：

[peaceheroines@gmail.com](mailto:peaceheroines@gmail.com)



ベルファスト、アンダーソンタウンでのピースピープルの最初の会合に参加したベティ・ウィリアムズとメイロード・コリガン。1976年8月14日

Alain Le Garsmeur "The Troubles" Archive / Alamy  
Stock Photo

## NFLA：核戦争の愚かさを示す博物館としてシェルターの保存を求める、議員の呼びかけを支持」

NFLAメディアリリース 2023年9月12日

英国・アイルランドの非核自治体協会（Nuclear Free Local Authorities）は、オールダム議員による、平和の名の下にオールダム町のシェルターを博物館として保存しようという、最近の呼びかけを支持します。

北朝鮮が核実験を行っていた2016年1月、Mirror紙が読者に「核戦争から生き残るために英国で最も適した場所はどこか」という質問を投げかけたところ、驚くべきことに1位は北部の町オールダムでした。なぜでしょうか？ 新しい市営のシビックセンターが建設されたとき、設計者のセシル・ハウイト・アンド・パートナーズがその下に鉄筋コンクリートとレンガでシェルターを作ったからです。

もちろん、2016年までには冷戦はとっくに終わっており、シェルターはその後荒廃していました。その存在が初めて明らかになったのは2015年5月、地方紙『マンチェスター・イブニング・ニュース』の暴露記事でした。その時、議会リーダーのジム・マクマホンOBEはこう述べました：「ここ（シェルター）が生存者の何人かが行き着く場所で、事実上、国に残されたものを運営する手助けを任されるのだと考えると、非常に奇妙で衝撃的だ」。

このシェルターは、核戦争に直面しても地方自治体の業務を維持しようとする究極の無駄の訓練のために、選ばれた市民指導者たちを収容するために建設されたのですが、イブニング・ニュースの添付写真は、この施設が現在、余剰のオフィス家具の地下保管スペースとして機能していることを明らかにしています。現在、シビックセンター自体が、事務所に勤務する職員の移転計画の一環として取り壊しの危機に直面しており、オールダム議会

のルイ・ハンブレット議員は、このシェルターの取り壊しは「オールダムの人々にとって、歴史的にも教育的にも、また新たな損失」となることを嘆き、ストックポートの旧空襲シェルターのように、博物館としての別の用途が見つかるかもしれないと、議会のエマ・バートン地域担当理事に手紙を出したのです。

この可能性は以前にも、デレク・ヘファーン議員によって提起されたことがあります。彼は、オールダム初の平和町長として、同様の提案を元最高責任者に手紙で送ったのです。彼は在任中、多くの学校を訪れて平和について講演し、オールダムを平和市長会議の活動に参加させ、オールダム平和誓約フォーラムの議長を務めるなど、平和の推進に精力的に取り組みました。就任時のハイライトは、広島に被爆者2人が訪れ、同じ原爆を生き延びたイチヨウの木から採取した種を植えるのを手伝ってくれたことでした。その結果生まれた苗木は、彼を偲んで区内の公園や学校に植えられています。

英国内には多くの軍事博物館がありますが、平和に特化した博物館は1つしかないのです。NFLAは、もっと増えることを願っています。平和博物館は現在、ブラッドフォード市の中心部から、隣接するサルタイアの象徴的でアクセスしやすいサルツ・ミルに移転中で、2024年秋にグランド・リニューアル・オープンを予定しています。

2030年までに、ロンドンに平和博物館を作る計画もありますが、NFLAは、オールダムのシェルターに博物館が出来ることが、真に象徴的な場での第3の可能生だと考えます。

NFLAは、ハンブレット議員のバートン女史に宛てた2通目の書簡の、保存と修復の嘆願に賛同しています。

NFLAのイングリッシュ・フォーラムの議長であり、リーズ・ピースリンクの議長でもあるデイヴィッド・ブラックバーン議員は、その理由を次のように語っています。

「NFLAの初めの発展は、サッチャー政権が将来のソ連との核戦争に備え、民間防衛準備に自治体を参加させるという計画を、マンチェスター市が拒否したことに端を発します。この拒否により、マンチェスター市議会は1980年11月5日、世界初の非核自治体であることを宣言し、1981年には、同様の宣言をした英国各地の議会がマンチェスター市に集まり、非核自治体連盟を結成しました。現在、NFLAは主に原子力発電に反対することに重点を置っていますが、私たちはICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）のメンバーであり、核兵器のない世界を求めて運動を続けています。

オールダムの方が保存、復元されて、営利的でない博物館になれば、ペニン山脈の別の側に第二展示スペースを提供できるでしょう。そして、核兵器の存在が全人類にもたらす脅威の大きさ、核兵器の使用によって広島と長崎にもたらされた被害、そして現在進行中の世界的な核軍縮キャンペーンを紹介することができます。

英国の他の場所でも、かつての核シェルターが冷戦の博物館として再開されましたが、オールダムは平和の促進に捧げられた最初の施設となるかもしれません。」

詳細については、NFLA事務局長のリチャード・アウトラムまでメールでお問い合わせください。

richard.outram@manchester.gov.uk

このメディアリリースはNFLAのウェブサイトでもご覧いただけます。

<https://www.nuclearpolicy.info/news/nflas-back-councillors-call-to-preserve-bunker-as-museum-to-foley-of-nuclear-war/>

翻訳：寺沢 京子



オールダム市民センター 写真：Wikipedia



## ZOOM 子ども博物館の 体験型展覧会 「言葉のあるなしで」 ウィーン・カルティエ博物館

FRAN EVE WRIGHT

子どもたちとのコミュニケーションは、他者とのコミュニケーションの取り方を教えるだけでなく、子どもたちの情緒の発達やその後の人間関係の築き方を形成します。ZOOMでは、子どもたちは一人で、あるいは少人数のチームで、五感を使って世界を探検します。

子どもたちは遊びながら、感覚的な印象や感情的な経験を身につけ、それが学習プロセスを始動させ、新しい知識を獲得することを可能にするのです。

エデュテインメントは、最高です。6歳から12歳の子供たちは、言語、筆記、手話、ジェスチャー、模倣、歌、音楽、絵画、ダンスなどを通して、他の人々とコミュニケーションをとり、理解し合う方法を探ります。子どもたちはパントマイム、点字、手話を試してみる！ ジャムクラブでは、リズムと色が共有言語となる。コミュニケーション・タワーは、参加者を高いところへ誘い、見えない相手とのコンタクトの取り方を体験させる。空気チューブを伝言が飛び交い、言葉のサラダが作られ、大失敗が舌を巻き、ZOOMニュースルームでニュースレポートが作られる。

気配りや敬意に満ちた相互作用と協力がなければ、理解は不可能だということがすぐにわかる。平和的で、包摂的で、強靭な社会を築くための基礎を築く、アハ！（わかったという）という瞬間である。



Disability symbols

ズームこども博物館ウィーンこども博物館のウェブサイトはこちら。

<https://www.kindermuseum.at/jart/prj3/zoom/main.jart?rel=en>

ZOOM子ども博物館は9月4日から10月3日まで休館します。10月4日からは、新しいプログラムをご用意し、皆様のお越しをお待ちしております。

秋のプログラムのチケットは9月24日よりお求めいただけます。ご予約は9月11日より承ります。

フラン・イブ・ライトはINMPおよび世界精神保健連盟の会員です。ユネスコクラブ・ウィーンプログラム・ディレクター



ZOOM 「言葉のあるなしで」

## MUSE 通信ミューズ (1990年の 1号から2023年の50号) オンラインで

国際平和ミュージアム顧問 山根和代

「平和のための博物館市民ネットワーク」通信ミューズは、第3回国際平和博物館会議が大阪と京都で開催された後の1999年に創刊された。以来、日本語版、英語版ともに年2回（現在は年4回）発行している。日本語版ニュースレター「ミューズ」は、現在53号を発行している。

なお、INMPの大会情報などは2003年から2013年にかけて発行されたミューズ通信に掲載されている。(INMPニュースレターはこの期間発行されていない)。

1999年から2023年までの通信ミューズはすべてオンラインでご覧いただけます。

日本の平和ミュージアムに関する情報をご希望の方は、以下のリンクから平和博物館における平和教育などの活動をご覧ください。

**1. 平和のための博物館市民ネットワーク公式サイト:** 現在作成中。近日公開予定。

### 2 安齋科学・平和事務所ホームページ

安齋科学・平和事務所のウェブサイトは <https://asap-anzai.com/>。

トップページのカテゴリーから「平和のための博物館市民ネットワーク」をクリックしてください。

(1) 日本語版を読むには

「ミューズ 平和のための博物館市民ネットワーク通信 (全号: 日本語版)」をクリックし、「ログインせずに進む」を選択し、「表示」を押してください。

(2) 英語版ニュースレターをご覧になる場合

[Muse : All issues \(English\)](#) をクリックしてください。「ログインせずに進む」を選択し、「表示」を押してください。1999号から最新号までをPDFファイルでダウンロードできます。

### 3. または、以下のリンクから英語版をご覧ください。

ミューズニュースレター第1号(1999年)から今日までを読むには、

<https://aki.teracloud.jp/share/11b29733c7ea26a1> をクリックしてください。

日本語の一番下の行をクリックすると、1999年から今日までの全号が表示されます。

ミューズ・ニュースレターはかつて印刷されていましたが、現在は印刷されていません。一部の号はイギリスのブラッドフォード大学の図書館、ペンシルバニア州のスワースモア大学のピース・コレクションなどに保管されています。日本だけでなく、海外のニュースも掲載されています。

山根和代は、立命館大学国際平和ミュージアム専門委員。

ENTWINED ATROCITIES:  
NEW INSIGHTS INTO THE  
U.S.-JAPAN ALLIANCE  
(PETER LANG, 2023)英語版  
のみ

YUKI TANAKA: 田中利幸  
(元広島平和研究所教授)

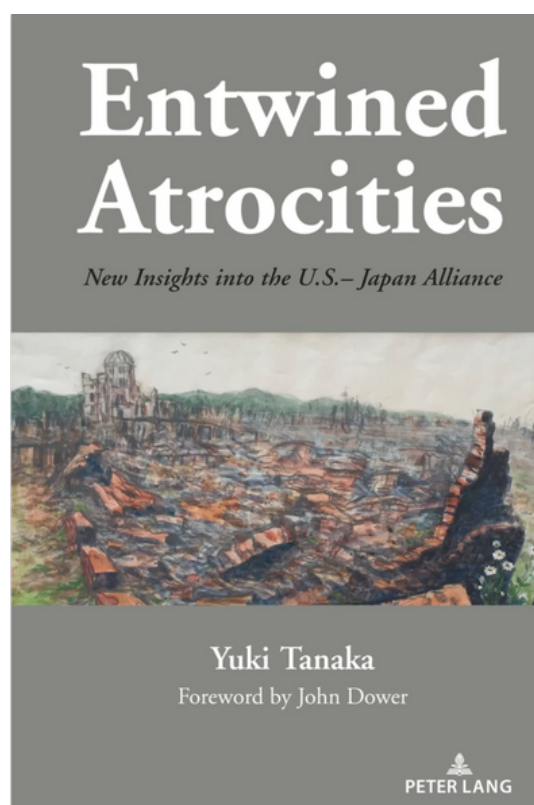
なぜ日本人は、戦時中および植民地支配時代に自分たちが犯した残虐行為に対する集団的責任感を育むことができなかつたのか。そして今もなお、なぜそれができないでいるのだろうか？

本書、Entwined Atrocities: New Insights into the U.S.-Japan Alliance (絡み合う残虐行為：日米同盟への新たな洞察)では、自国日本の戦争責任に対する日本人の態度が、アメリカ人が自国と日本の両方の戦争責任に対してとっている態度といかに密接に絡み合ってきたか、そして今も絡み合っているかを示そうと試みた。

本書の「まえがき」で、ジョン・ダワー教授は本書の内容を次のように簡潔にまとめている。

「一つは、日本の残虐行為と戦争犯罪である。もう一つは、米国の戦略的核攻撃による民間人殺害の犯罪性である。第三は、天皇の戦争責任に関する戦後直後の日米両国による隠蔽工作（そしてこれがアメリカの空爆の非道な性質の隠蔽工作とどのように結びついているか）である。第四に、この二重の隠蔽体質が、いわゆる平和憲法（1947年施行）に固有の矛盾を生み出し、それが現在も改正されずに残っている。最後に、このダイナミックな連関を理解することで、現在の日本の民主主義の欠陥と失敗をよりよく理解することができるという点に焦点を当てる。」

つまり本書の目的は、焼夷弾と原爆による無差別殺戮、そして日本の平和憲法という二つの重要な問題を綿密に分析することによって、戦争責任をめぐってもつれている日米関係を解きほぐし、これらの問題が歴史的にどのように絡み合っているかを明らかにすることである。



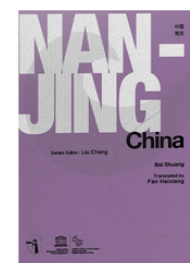
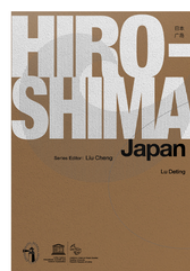
<https://www.peterlang.com/document/12853>  
67



‘INTERNATIONAL CITIES OF  
PEACE’ BOOK SERIES 英語版

LIU CHENG

本シリーズ『国際平和都市』では、5つの都市を紹介する。これらの都市はいずれも、その歴史の中で戦争のトラウマを経験し、その記憶が世代を超えて語り継がれている。歴史は常に心に留めておかなければならないし、歴史を鏡として使うことで、このような歴史的悲劇が二度と起こらないようにすることができる。しかし、平和構築は過去の苦しみを記憶し、そこから立ち直るための最良の救済策である。都市のトラウマ的な記憶が人類共通の記憶に変わるとき、私たちは過去の災害を、ステレオタイプ化された政治的記憶を超えた新たな方法で理解することができる。そうすることでしか、トラウマとなった歴史を未来の平和につなげることはできず、かつての敵対関係者間の和解を促進し、人類が未来を共有する共同体の確立への希望を高めることができる。5都市はいずれも、平和文化の構築に積極的に取り組んでいる。戦争記憶の研究は三次元的に変化している。英雄の記憶からトラウマの記憶へ、戦勝国の記憶からすべての戦傷国の記憶へ、そして一国の国内的な歴史的記憶から多くの国が共有する歴史的記憶へと。より多くの都市が平和都市の建設に取り組み、平和都市の世界的ネットワークが形成されれば、戦争の記憶は最終的には平和の記憶に取って代わられる、というのが私たちの信念である。本シリーズは、平和学という学問的基盤の上に成り立っている。



シリーズ・エディター: 刘成 (リウ・チェン)  
 南京大学歴史学教授、ユネスコ平和学講座主任、平和研究所所長、英連邦研究所所長。

## 平和構築の実践：実践者のための テキスト 東南アジアにおける概 念と実践の概要

ウィメン・ピース・メイカーズ・  
カンボジア

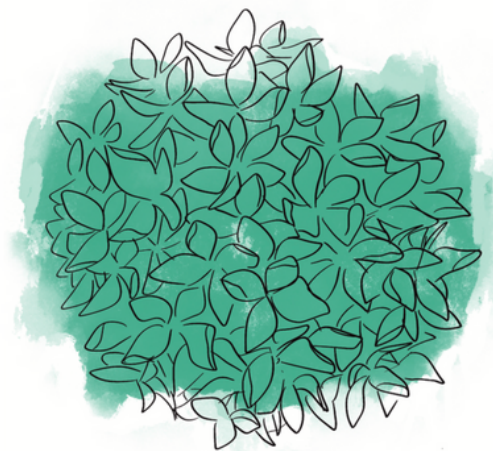
本書は、カンボジアの民族間交流の場で、若者の視点から歴史を探求したウィメン・ピース・メイカーズ（WPM）2020の活動に触発されたものである。この集会では、過去が現在の私たちのあり方や、他者や自分自身との関わり方に深く影響していることが示された。特に1975年から1979年にかけての大虐殺と、それに続く数十年にわたる内戦は、教育制度が完全に崩壊する一方で、トラウマ、戦争、サバイバルによって傷ついた社会を形成した。

本書は、平和構築の概念を簡単に概観しながら、東南アジアの状況に文化的に対応し、平和構築の複雑な性質を示す、この分野で活用されているさまざまなツールや介入の種類を教師や学習者に紹介する。本書は、有意義で挑戦的な対話や、希望に満ちた変革的な対話を支援する場を共同創造することを目的としている。

本書の全体的な目的は2つある。1) 非暴力と平和構築を支える理論的側面を説明すること。2) 理論が東南アジアの文脈でどのように実践に応用されているかを示すこと。この学際的なエッセイ集は、さまざまな「知る」方法を通して平和構築を考察している。各章は同じように構成されている。その章の基調となるカンボジアの言葉やことわざを根拠としている。

各章は理論から始まり、その章の目的を述べ、2-3点を強調する。次に、そのトピックを支える状況やシナリオを説明しながら、地域の人々の考えや感情を描写して、東南アジアの文脈の中で理論を実践に移していく。最後に、トピックを支え、状況を解決するためにどのような行動がとられたかを詳述する。

## PEACEBUILDING PRACTICE A TEXTBOOK FOR PRACTITIONERS



AN OVERVIEW OF CONCEPT AND PRACTICE IN SOUTHEAST ASIA  
EDITED BY STACI B. MARTIN, EdD  
2023

### [Link to the book](https://wpmcambodia.org/project/peacebuilding-practice-a-textbook-for-practitioners/)

本へのリンク：

<https://wpmcambodia.org/project/peacebuilding-practice-a-textbook-for-practitioners/>  
ISBN-13: 978-9924-9199-7-1

マーティン, B. (2023). 平和構築の実践  
Peacebuilding Practice : A Textbook for  
Practitioners; An overview of concept and  
practice in Southeast Asia. Women Peace  
Makers (Cambodia).

このリンクから無料でダウンロードできま  
す。

## INMP 30周年記念 ウェビナーの冊子

MONA BADAMCHIZADEH

2022年12月6日にテヘラン平和博物館（TPM）で開催された、平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）設立30周年記念ハイブリッドウェビナーの内容をまとめた冊子を発行しました。

本冊子は、各講演者・発表の要旨を掲載することで、読者の皆様にウェビナーの内容を包括的にご理解いただくことを目的としています。各要旨にはQRコードが添付されており、読者は対応するプレゼンテーション・ビデオに簡単にアクセスすることができます。したがって、この冊子は貴重な資料としてだけでなく、この特別な機会を記念するものでもあります。

ウェビナーでは、INMPの過去30年にわたる素晴らしい活動が紹介され、続いて、テヘラン平和博物館と、一般的な戦争の結果や、特にイラン・イラク戦争で使用された化学兵器の後遺症についての認識を高めることを通じて平和を促進する同博物館の取り組みが紹介されました。そして最後に、INMPの変化、現在のプロジェクト、ウプサラで開催された第11回平和博物館国際会議に焦点を当て、INMPの将来について論じました。

この小冊子は、読者の好奇心を刺激し、INMPと平和のための博物館が行っている貴重な活動について、より深く知ってもらうことを目的としています。この冊子は、ウプサラ会議の参加者向けに限定数で配布されました。



オンライン版はINMPウェブサイト（[inmp.org](https://inmp.org)）からアクセスできます。  
<https://sites.google.com/view/inmp-museums-for-peace>

なおこの日本語版が出版されました。